海辺の扉

上

宮本輝

teru miyamoto

海辺の扉（上）

宮本 輝

角川文庫 8824

平成四年十二月十日 初版発行
平成五年五月二十日 四版発行
発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話 編集部(〇三)三八一七—八四五一
営業部(〇三)三八一七—八五二一
〒一〇二 振替東京③一九五二〇八
印刷所——大日本印刷 製本所——文宝堂
装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

み 6-6 ISBN4-04-146906-6 C0193

海辺の扉

（上）

宮本輝

角川文庫 8824

目次（上）

序　五
第一章　馬に乗った少年　八
第二章　廃墟のモザイク　八七
第三章　渚の小石　一五六
第四章　風車　二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

諏訪湖の湖面は波立たず、遠くで幾つかの光が真横に動いていた。宇野満典は、もう五時間近く、その光ばかり見つめながら、ひたすら電話を待った。

夜中の三時をすぎ、満典は、諏訪湖畔沿いの旅館の窓をあけ、遠くで動く光が何なのかをさぐった。それは、湖の対岸にある高速道路を走る車のライトであった。ひどく静かな、平和な光に見えた。

窓をあけたので、たちまち数匹の浮塵子が部屋に入ってきた。あけつづけていれば、やがて、部屋中に、浮塵子の大群が飛びかうだろうと思いながら、宇野満典は、自分と離婚して五年になる琴美の家に思い切って電話をかけた。

誰も出てこなかった。今夜、自分が諏訪湖の旅館で電話を待っていることを、琴美には手紙でしらせてあった。だから、こんな夜中の電話が誰からのものなのかを、琴美は知っ

ているはずなのだった。

満典は、あきらめて受話器を置き、また窓辺に行くと、黒い湖面と、遠くで動く光を見つめた。そして、これから自分はどこへ行こうかと考えた。自分は、野良犬みたいに生きられるだろうか……。しかし、そのように生きてみたいな……。

彼は酒を飲み始めた。酔いが廻ってくると、何年か前、恋人時代に琴美と泊まったこの旅館にやってきた自分に唾を吐きかけたくなった。それで、床の間の柱に自分の額をぶつけた。何度もぶつけた。額が少し切れ、血が檜の柱にこびりついた。

やがて、疲れて、満典は柱に額を押し当てたまま、声をあげずに泣いた。湖畔に発生する浮塵子は、群れをなして旅館の部屋で飛んでいた。

満典は、朝の八時まで電話を待ったあと、勘定を払って、朝食もとらずに旅館を出た。初秋の朝日は、諏訪湖を茫洋と光らせて、まるで穏やかな海のように見せ、満典の目に痛みをもたらした。彼は、喪ったものの大きさを考え、しばらく湖畔にたたずんだ。これから始まるであろう、予測のつかない未来に対する不安はまるでなかったし、期待など、ひとかけらもなかった。野良犬のように生きてみたいという思いは、強くなっていた。

満典は、この自分を許さなかった者たちを、自分もまた許さないだろうと思った。人間の心に生じる幾様もの愛情に対しては、彼はこの数年間、考えすぎるほど考えてきたので、もはやそれへの思考に疲れきってしまっていた。

湖畔に沿って歩きだした瞬間、満典は、死んだ晋介の声を聞きたくて、きのうから今朝まで、別れた妻からの電話を無為に待ちつづけていたような気がした。そして、この自分を許さなかった者たちを、自分もまた決して許さないでおこうと己に誓った。

「だけど、野良犬は、誰にも恨みを持たないだろうな」

満典は、何度か、胸の内でそう言った。

第一章　馬に乗った少年

ギリシャ国立考古学博物館の、一カ所あけはなたれた小さな窓から昼下がりの澄明な光が差し込み、大理石の床に歪(ゆが)みのない四角い金色(こんじき)を形造っていた。

宇野満典には、それがこの博物館に納められている古代ギリシャの貴重な彫刻や夥(おびただ)しい装飾物よりもはるかにおごそかな遺品のように見えて、ふと立ち停まったまま、なんだか正体不明の敵と向かい合った気分で、いっとき睨(にら)みつけた。

けれども、珍しくも何ともないただの強い光線の模様ではないかと思うと、そんな些細(ささい)な自然現象を幼稚に神秘化したり、何らかの意味をもたせようとしてしまう自分にむしゃくしゃし、彼は床に落ちている正方形の、目に沁(し)みる光を踏みにじるために歩み寄って行った。

彼がそこに辿(たど)り着くまでに、別の人影によって光は消えた。アメリカ人の団体ツーリストたちが、片腕のもげた若者の裸像の前に、騒々しく寄り集まったからだった。各部屋の

入口と出口では、木の椅子に、博物館の警備員が坐(すわ)っていた。軽蔑を宿した上目使いでアメリカ人ツーリストたちを見やってから、警備員は小さく欠伸(あくび)をした。

宇野満典は腕時計を見た。約束の時間が近づいていた。彼は警備員に訊(き)いた。

「少年が馬に乗ってる像はどこにあるんですか？」

警備員は、眠そうな、黒味がかった栗色の目を向けた。

「あんた、どこを通ってこの部屋に来たんだい」

「入口から。ちゃんと入場料を払ってね。それからまっすぐ歩いて、ちょうど真ん中で左に曲がった」

「じゃあ、目をつむって歩いて来たってわけだ」

「よく知ってるね。ひどい二日酔いで、ほんとに半分死んでるよ」

満典は眉(まゆ)の上あたりを指先で強く揉(も)みながら言った。顎(あご)をしゃくって薄く笑い、警備員は、

「ここは二十三番の部屋だ。二十一番にブロンズの大きな馬が、ど真ん中に置いてあるさ。いきのいい馬だから、わざわざそこに置いてあるんだ。生きてるように見えるのは、あのガキと馬だけだからな。あんた、その像の前を左に曲がったんだよ」

と教えてくれた。満典が引き返しかけると、

「あんた、日本人だろ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そう言って、そっとアメリカ人ツーリストたちに視線を戻した。
「ああ、そうだよ」
「ギリシャ語、うまいね。アテネで暮らしてるのかい？」
「うん、もう四年ほどね。発音はひどいけど、単語だけはたくさん知ってる。それを並べてるだけさ」
「五千年前の文化が、やつらにわかる筈ねェよな」
満典は、警備員の視線を追い、退屈そうに天井を見あげているアメリカ人の何人かを見やった。
「アメリカ人を嫌いかい？」
「金はあるが、歴史はない。俺は、あいつらが滅びるときを知ってるんだ」
「へえ、いつ？」
「権力のための文化が欲しくなったときさ」
「あんた、歴史学者になれるよ」
満典は、博物館の中央部に急いだ。大きなブロンズの馬の後脚が見え、それを取り囲んでいるドイツ人やアメリカ人の観覧者が、どれも不透明な黄色の照明を浴びて固まっていた。とにかく、その中にまぎれこまなければならないのである。
満典は、指示どおりに、入口で買った陳列物のぶあつい説明書を丸め、それで自分の肩

を叩いた。人垣に割って入る前に、斜めうしろで、
「この馬と少年は、いつごろ作られたものでしょう」
白い麻の背広を着た男が小声で話しかけてきた。いやに鼻の大きな男であることぐらいしかわからなかった。
「紀元前です。紀元前」
それも指示どおり二回繰り返した。
「ほう。誰が作ったんでしょうね。じつに見事だ。まるで生きてるみたいですよ」
間違いなく、決められた言葉だったので、
「この本の中に書いてあります」
満典はそう言って、説明書を丸めたまま男に渡した。男の顔を見る気もなかった。
「ちょっと見せていただいてもよろしいでしょうか」
「どうぞ」
「ありがとう。私はもっと簡単なパンフレットを買いました。あなたに差しあげましょう」
ちらっと男の横顔が見えた。全部ではなく、鷲鼻と、太い眉だけが、満典の隣に立っているアメリカ人の婦人の頭越しにかすめた。男は、薄いパンフレットを満典に渡したあと、説明書のページをくっていたが、やがてそれとなく離れ、何十人もの観覧者のあいだを縫

って博物館から出て行った。

洞窟のような中央の広い通路が巨大な円柱の向こうの眩い広場を空しく見せ、男の姿は黒い輪郭だけになって消えた。

満典は、再び眉の上を指先で揉んだ。あいつも、下請けの下請けなんだろうと思った。ガイドに引率されて、ツーリストたちが別の展示物へと移ってしまい、一瞬、馬と少年の周りは静かになった。ギリシャに来て、来月で丸四年になるというのに、満典は一度もこの国立考古学博物館に足を踏み入れたことはなかった。

彼は、何気なく馬と少年に目をやり、男から渡されたパンフレットを思わず落としそうになった。ブロンズの少年の顔が、死んだ自分の息子とそっくりだったのである。

息子が死んだのは二歳になったばかりのときであり、馬に乗っている少年は、六、七歳とも十二、三歳とも取れるのだが、顔の形といい目元といい、口元といい頬から顎への線といい、瓜二つと言えるほど似ていた。

満典は、長いあいだ、そこから動くことが出来なかった。少年は、幾分、顔を右側に傾けていて、満典の立っている場所が、ちょうど少年の目線に当たってもいたのである。満典には、少年が何物かから逃げようとして怯えているように見えていた。

別のツーリストたちが集まって来たので、満典は見る場所を反対側に移した。右側からは少年の顔は見えず、何物かに勇敢に挑もうとしているかに映った。満典は、そこから少

し離れた売店で、さっき男に渡したのと同じ説明書を買うと、汗ばんだ手でページをめくった。英語による説明文には〈アルタミスの馬と乗り手〉としるされてあった。

――馬と乗り手が、じっさいに同じ作品として作られたのかどうかという問題は、いまだに解決されていない。美術史家のかなり念入りな調査によらなければ、決定的な証明は出来ないであろう。馬には、極限の緊張状態が表現されている。馬の頭も前脚も、乗っている少年の頭も前傾姿勢で、すさまじい迫力がある。馬は全速力で走っている状態であり、乗っている少年のキトン（古代ギリシャの、じかに肌につけるガウン）にはたくさんの皺が寄り、その少年は風でうしろに吹き飛ばされそうな様子である。その速力の描写がすさまじい。少年の顔は、あまりに真に迫っているために、醜いくらいにまで表現されている。少年の小さな体も、馬から振り落とされまいとして歪んでいる。この作品は、人間の熱情を表現したすばらしい一例であって、ヘレニズム時代における文化の最盛期に活躍した芸術家たちが、彼等のインスピレーションを全投入して創りだしたものである。紀元前二世紀の中頃の作品と推定される――。

読み終えると、満典は再び、紀元前二世紀にすでにこの世に存在していたブロンズ像の傍へ行き、あたかも見知らぬ人の行き倒れを、もしや自分の愛する者の誰かではないかと確かめる通行人のように、首をかしげて目を凝らした。彼は、棺に納められた自分の幼い息子の死に顔を見ていない。

葬儀の日、満典は警察で何人かの刑事たちから執拗な取り調べを受けていたのだった。けれども、おそらく息子は死んだあと、よりいっそうこのブロンズの少年とそっくりになっていったことだろう。この黒ずんだ青い顔……。そんな気がして、満典は馬に乗った少年の像から思い切って目をそむけ、人々をかきわけ、蹣跚とした足取りで博物館を出、広場への階段を降りて行った。

シーラに逢い、パンフレットを渡し、金を貰うという作業がひどく億劫に感じられた。〈父のせっかんで幼児死ぬ〉。〈鬼のような父、二歳の息子をなぶり殺す〉。十年前の、日本の新聞や週刊誌の見出しが甦った。

とにかくシーラの店へ行かなければならない。早く用事を済ませてアパートへ帰ろう。両手でひさしを作り、満典は、博物館前の広場の周りを埋めているカフェテラスを眺めた。日除け用の大きなパラソルに光をさえぎられているのに、無数のアルミの丸いテーブルはぎらつき、次第に揺れ動き始めた。

なんと可愛い子だったことだろう。俺が仕事を終えて帰宅すると、びしょびしょに濡れた涎掛けをぶらさげたまま玄関まで這ってきて、なんだかわけのわからない言葉を発しながらむしゃぶりついてきた。琴美が、笑顔で新しい涎掛けを持ってくる。俺はちっぽけな息子を坐らせ、涎掛けを代えてから抱きあげる。その、甘い、乳臭い匂いを、どんなに愛したことか。満典の中に、そんな思いが拡がり、立っていられないほどの眩暈をもたらし

た。しかし彼は広場を突っ切り、パティシオン通りに出た。通りには太陽が照りつけ、交通渋滞で一寸刻みにしか進まないタクシーや乗用車が吐き出す排気ガスがこもっている。

道の途中で倒れるのではないかという不安がよぎったが、彼はタクシーにもトロリーバスにも乗らず、パティシオン通りを南へ歩いた。シンタグマ広場の手前までは、車に乗るよりも徒歩のほうがよほど早いのだった。

彼は、木陰で何度か休憩した。汗が腋の下や胸を伝い、息が苦しかった。クラクションの鳴る騒然とした通りのどこかから、誰かが自分を呼んだような気がして振り返った。赤毛をブロンドに染めたゴギーが、タクシーの助手席の窓をあけ、

「はーい、ミツノリ」

と呼んだ。観光協会公認の、日本人相手のガイドをしている。タクシーの中には、中年の日本人夫婦が乗っていた。

「どこまで、行きますか？　わたくし、さっき、パルテノーンで、エフィーに逢いましたよ」

ゴギーは日本語で言った。本名はゴルギーナ・カチャロスなのに、日本人には〈ミセス・シンシア〉と名乗る。けれども、仲間は陰で、彼女を〈女狐ゴギー〉と呼んでいるのだった。

「シンタグマ広場の近くまで」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com